

〔直訳〕

9 だが彼は始めた **民** に向けて 言うことを このたとえを。

「ある」人が 造った **ぶどう園**を

そして 小作に出した それを **農夫**たちに

そして 旅に出た 長い間。

10 そして 時期に **彼は遣わした** 農夫たちに向けて 僕を

ようにと **ぶどう園**の実りから 彼らが与える 彼に。

だが農夫たちは **追い返した** 彼を 殴って 空手で。

11 そして 彼は加えた 他の **送る**ことを 僕を。

だが彼らは 彼もまた

殴って そして 侮辱して **追い返した** 空手で。

12 そして 彼は加えた 三番目の者を **送る**ことを。

だが彼らは この者もまた 傷を負わせて **投げ出した**。

13 だが言った **ぶどう園**の主人は、

『何を 私が行うだろう』

私は送るだろう。私の息子を 愛する者を。

おそらく この者を 彼らは尊敬するだろう。』

14 だが見て 彼を 農夫たちは 相談して 互いに 言いつつ、

『これは ある 相続人で 私たちは殺そう 彼を

ようにと 私たちのものに なる **相続財産**が。』

15 そして 投げ出して 彼を **ぶどう園**の外に **彼らは殺した**。

そこで何を 行うだろう 彼らに **ぶどう園**の主人は

16 彼は行くだろう

そして 彼は滅ぼすだろう **この農夫**たちを

そして 与えるだろう **ぶどう園**を 他の者たちに。」

だが聞いて 彼らは言った、

「それが起こることがないように。」

17 だが彼は 目を向けて 彼らに 言った、

「そこで何で ある この書かれていますことは。

『石 ところの 退けた 建てる者たちが

これが なった **隅の頭石**に。』

18 落ちる者は皆 その石の上に 打ち砕かれるだろう。

だが誰かの上に それが落ちれば

それは押しつぶすだろう 彼を。

19 そして 欲した 律法学者たちと祭司長たちは

投げかけることを 彼の上に 手を そのとき、

そして 彼らは恐れた **民**を、

なぜなら彼らは知った 次のことを

彼らに向けて 彼は言った このたとえを。

〔新共同訳〕

9 イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。10 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。11 そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した。12 更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。13 そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』14 農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』15 そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。16 戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。』彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。17 イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。

『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』
18 その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」19 そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。

①構成

㉑ 9 節 a と 16 節 b — 19 節

㉑ 9 節ではイエスが語りかけた相手が示され、19 節ではイエスの言葉に対する反応が描かれている。9 節と 19 節には「民」が用いられており、この語によって対応している。ルカにおける「民(ラーオス)」は、救いを受け入れる準備のできた人たちのことである。

㉑ この民は「メシアを待ち望む」人々でもある(三 15)。ルカ 3 章 15 節を新共同訳は「メシアを待ち望む」と訳すが、原文では何を待ち望むのか、その対象は書かれていない。書く必要がないほどに明白だからだろう。

㉒ 9 節 b — 16 節 a

㉒ 9 節 b と 15 節 b — 16 節 a は、「ぶどう園」と「農夫」によって対応している。ぶどう園はイサエルを示すシンボル。ぶどう園の主人の期待を裏切った農夫たちの行動を描くことを通して、イサエルのあるべき姿が示される。

㉑ 10 — 15 節 a では、「ある人(ぶどう園の主人)」と農夫の行動が描かれている。「ある人」は「遣わし、送る」ことを繰り返す。「ある人」は僕を三回送り、最後に息子を送る。遣わされた者への農夫たちの行動の描写は言葉を変えながらエスカレートしていく。

②民にたとえを語る(9 節 a)

㉑ イエスが神殿の境内から商人を追い出し、境内で教えているときにも、「祭司長、律法学者、民の指導者たち」はイエスを殺そうと諮るが、「民」がイエスの話に聞き入っていたために、何も

することができなかった(一九四八)。

⑥ イエスが神殿の境内で「民」に教え、福音を告げ知らせっていると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと一緒に近づき、何の権威で教えているのかとイエスを問いただす(二〇二)。しかし、反対に、イエスがヨハネの洗礼について尋ねると、彼らは「人からのもの」と言えば、「民」が石で打ち殺すと察して、「分からない」と答える。

⑦ メシアを待ち望み、洗礼者ヨハネを「天からのもの」と信じる「民」を、律法学者たちや祭司長たちは恐れる。この「民」に向けてイエスはたとえを語り始める。

③ ぶどう園を他の者たちに与える (9 節 b—16 節 a)

⑧ 「時期に僕を遣わした」。原文では「時期」と書かれているが、これを新共同訳は「収穫の時」と訳す。「時期(カイロス)」は、一般的な「時」を表すだけでなく、「適当な時機、適切な時、ふさわしい時節」の意味でも用いられる。ここでは後者の意味で用いられており、並行箇所のマタイ 21 章 34 節では「実りの時期」と述べられている。

⑨ 主人は「ぶどう園の実りから農夫たちが彼に与えるように」と期待して、僕たちを遣わす。農夫たちのあるべき姿は、実りに「ふさわしい時節」に、ぶどう園の実りを主人に「与える」ことである。

⑩ しかし、農夫たちは「実りを与える」ことをせず、主人が送った僕たちを追い返す。

僕を、殴って、空手で追い返す (10 節)

他の僕も、殴って、侮辱して、空手で追い返す (11 節)

三番目の者も、傷を負わせて、投げ出す (12 節)

息子を、ぶどう園の外に投げ出して、殺す (15 節)

彼らは最初の僕を「殴って空手で追い返した」が、次の僕に対しては「侮辱して」が加わる。さらに三番目の僕に対しては、暴力がエスカレートし、「傷を負わせて投げ出す」。そして最後に主人が送った息子に対しては「投げ出して殺した」。

⑪ 「相続財産が私たちのものになるように」と。当時の決まりによると、相続人のいない財産は、最初にそれを占有した者の財産となった。農夫たちは不在地主の息子が来たのを見て、地主が死んだと思い、跡取りさえ殺せば、財産は自分たちのものになると考えたのかもしれない。

⑫ 並行箇所のマルコ 12 章 8 節では、

そして 取って 殺した 彼を

そして 投げ出した 彼を ぶどう園の外に

と述べられている。これをルカとマタイは「ぶどう園の外に投げ出してから殺した」という描写に変えている。これはユダヤ教の指導者たちがイエスをエルサレムの城壁の「外に」、十字架刑の場「されこうべ」に連れ出して殺したと関連づけるためである。

⑬ 「たとえに登場する一つ一つの要素がたとえられている事柄とそれぞれ関係するようなたとえ」は寓喩と呼ばれる。しかし、一般的に言って、イエスのたとえは寓喩ではなく、「狭義のたとえ(たとえたとえられている事柄とが、たった一つのポイントで関連するようなたとえ)」であ

った。

㉔ イエスのたとえは教会で語り継がれるうちに、寓論的に読まれるようになったと推測される。このたとえを寓論的に解釈するなら、「ぶどう園の主人」は神、「ぶどう園」と「農夫たち」はイスラエルの民、遣わされる「僕」たちは預言者、主人の「息子」はイエスと見なされる。しかし、イエスがこのたとえを語ったときには、「ぶどう園」も「主人」も「僕たち」も「息子」もたとえを一つの物語にするための要素にすぎず、たとえられている事柄とは直接に関係していなかったと考えられる。

㉕ 言葉の対応から考えると、たとえのポイントは16節の「他の者たちにぶどう園を与えるだろう」にあると思われる。というのは、ぶどう園を造った際には主人は農夫たちにそれを「小作に出した」。しかし、農夫たちが主人の期待を裏切ると、主人は彼らを滅ぼし、代わりにぶどう園を他の者たちに「与える」と述べられており、動詞が変えられて対比されているからである。

④ 民を恐れる（16節b―19節）

㉖ 17節は詩編一一八の22節の引用であり、イエスの受難と復活を表す（使四11）。しかし、イエスのたとえには「息子」の復活は述べられていないので、これはイエスの受難と復活を体験した初代教会の解釈である。さらに、18節はイザヤ8章14―15節やダニエル2章34・45節に基づいており、エルサレムの滅亡を暗示するが（一九40・44）、この言及はマタイとマルコには見られない。

㉗ イエスは「民」に「ぶどう園と農夫のたとえ」を語るが、それは「律法学者たちや祭司長たち」への当てつけである（19節）。それに気づいた律法学者たちと祭司長たちはイエスに手を下そうとするが、「民」を恐れる。

㉘ 「民」はイエスが教え、福音を告げ知らせる相手であり、イエスの話に聞き入る人々である。「民」の熱心さは、イエスを殺そうとする律法学者たちや祭司長たちを怯ませるが、「闇が力を振るう」時が来ると、彼らはイエスを捕らえる（二二53）。

⑤ 「実りを返す」者として生きる

㉙ 小作人である農夫たちの務めは「実り（収穫）から与える」ことである（10節）。「実りから与える」という表現は、「実りを分け与える」あるいは「実りを返す・納める」を意味する。しかし、農夫たちは主人との契約を破る。収穫を納めず、相続財産を狙う農夫たちを主人は滅ぼし、ぶどう園を他の者たちに「与える」。「与える」は10節で農夫の務めを表すために用いられた言葉であり、同じ動詞が16節では主人と他の者たちとの関係を表す語として用いられている。

㉚ ルカでは、主人は農夫たちが「実りから与えるように」と期待して、僕を遣わす。しかし、並行箇所マルコ12章2節とマタイ21章34節では、実りを主人が「取る」ために僕を遣わす。新共同訳聖書はいずれもこの箇所を「受け取る」と訳している。「主人が取る」という表現を、「農夫たちが与える」という表現にルカが変えたのであれば、「実りから与える」という農夫の務めを示すことにルカの狙いの一つがあるのかもしれない。主人はぶどう園を「与え」、与えられた者たちは主人に「実りから与える」。救いを与えられた者として、その救いにふさわしい生き方を返していく。この応答関係を生きることが求められている。